

大阪湾再生行動計画（二期計画）の概要

- 理 念
- 大阪湾の環境の改善（多様な生物の生息・生育、人と海との関わりの増大）に向けて、多様な主体の連携・参画（空間ネットワーク及び人的ネットワークの充実・強化）により、森・川・里・都市・海等の取り組みの輪を広げ、効率的・効果的な取り組みの推進を図り、大阪湾の再生とともに新しい大阪湾の創出を目指す。
- 意 義
- 多様な生物の生息・生育
 - ・生物多様性を確保する
 - ・生物の生産性を確保する○人と海との関わりの増大
 - ・体験学習等の機会創出により豊かな人材を育成する
 - ・水に親しむ機会創出により生活の質を高める
 - ・大阪湾の文化を観光資源につなげる○空間ネットワーク及び人的ネットワークの充実・強化
 - ・空間（森・川・里・都市・海等）ネットワークの充実・強化
 - ・人的（多様な主体、各世代のつながり）ネットワークの充実・強化

経 緯

○平成 13 年 12 月：「海の再生」都市再生プロジェクト（第三次決定）

○平成 15 年 7 月：大阪湾再生推進会議 設立

○平成 16 年 3 月：大阪湾再生行動計画（第一期）策定

○平成 26 年 3 月：大阪湾再生行動計画（第一期）最終評価

○平成 26 年 5 月：大阪湾再生行動計画（第二期）策定

○平成 31 年 3 月：大阪湾再生行動計画（第二期）中間評価
- 計画期間 ○平成 2 6 年度～平成 3 5 年度 （1 0 年間）
- 取組体制
-
- 大阪湾再生推進会議 構成機関
内閣官房、国土交通省、農林水産省、経済産業省、環境省、関係都道府県、関係政令指定都市、関西観光本部、大阪湾広域臨海環境整備センター
- 目 標
- 森・川・里・都市・海等のネットワークを通じて、美しく親しみやすい豊かな「魚庭（なにわ）の海」を回復し、市民が誇りうる「大阪湾」を創出する。
- 目標要素と達成状況の評価
- 全体目標を更に分かりやすく身近で具体的なイメージに展開するため、3 つの目標要素（美しい「魚庭（なにわ）の海」、親しみやすい「魚庭（なにわ）の海」、豊かな「魚庭（なにわ）の海」）を以下の通り設定。

○各目標要素毎に、目標を達成するための施策、定量的な進捗状況进行评估するための評価指標を設定。
-
- 中間評価について
- 目 的 ○取り組み状況並びに目標達成状況について把握し、必要に応じて計画の改訂等を実施することにより、より効率的・効果的に取り組みを推進するため、「中間評価」を実施する。

時 期 ○計画策定 5 年後に実施することを基本とし、施策の進捗状況等に鑑み、実施時期を決定する。

評 価 内 容 ○取り組み状況並びに目標達成状況、課題等を整理し、中間評価報告書としてとりまとめる。

評価対象期間 ○平成 2 6 年度～平成 2 9 年度 （4 年間）

実 施 方 法 ○毎年度のフォローアップ結果を基に、行動計画開始年度から中間評価実施年度までの取り組み状況並びに目標達成状況について評価を行い、課題及び今後の取り組み方針について整理する。
- 1

『美しい「魚庭(なにわ)の海」を達成するための取組』の中間評価

【目標要素】

水辺を快適に散策できる海（湾奥部）や水に快適に触れ合える海（湾口部、湾央部）を目指し、汚濁負荷やごみの削減等の取組を行うとともに、効果のモニタリングを行う。

【施策の進捗状況】

- 第 8 次総量削減計画を策定し、生活排水対策等の陸域からの汚濁負荷の削減を積極的に推進してきた。高度処理普及率は 57.6%（H26-H29:3.8 ポイント増加）(①)、農業集落排水の整備率は 94.2%（H26-H29:6.4 ポイント増加）(②)と着実に向上した。
- 雨天時における市街地からの汚濁負荷を削減する合流式下水道の雨水貯留管整備等を推進し、平成 26 年度に「平成の太閤下水」が完成した。(③)
- 農業濁水や家庭雑排水の流入を防止する農業用水による汚濁負荷の削減策、森林からの土砂流出等の削減に資する森林整備（年間 5 千 ha 程度）など面源負荷の削減が着実に実施されており、市民や企業等が参加する森林整備 (④) の面積は長期的に増加傾向を示し年間に 300ha 程度まで拡大してきた。
- 河川や湖沼における浄化浚渫や覆土等の有機汚泥対策を大和川水系の支川や寝屋川、平野川、琵琶湖の内湖などにおいて継続的に取り組み、施工面積を着実に増やしてきた。
- 流域住民、NPO、企業等の参画・連携による河川ごみ、海域の漂着ごみの回収対策等により、毎年 1 千 t 程度のごみを回収 (⑤) しており、ごみ回収に参加する市民の数は、年によって増減はあるものの 3 万人から 5 万人に達している。
- 企業、研究機関等の多様な主体が参加したモニタリングを推進し、大阪湾再生水質一斉調査 (⑥) では約 50 機関：約 500 地点の調査が定着しており、調査結果は発表会やホームページで発信と共有化を進めた。

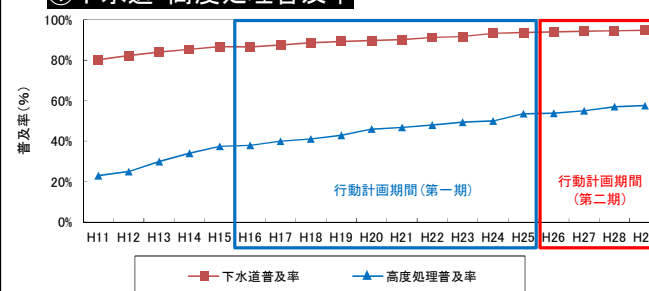
【評価指標】

- 大阪湾の水質調査結果では、COD は概ね横ばいであるものの、T-N、T-P は減少傾向を示し、赤潮の発生頻度も抑えられており、「美しい魚庭の海」を目指した取組の成果が表れている。(⑦)
- 大阪湾臨海部での利用者アンケート調査では、「海の色」、「海のにおい」、「ごみの量」について「改善された」との回答が 5 割～6 割を占め、「悪化した」との回答の 1 割～2 割を大きく上回る結果となり、大阪湾の水質に対する利用者の評価は第二期計画の策定時に比べて大きく向上している。(⑧)

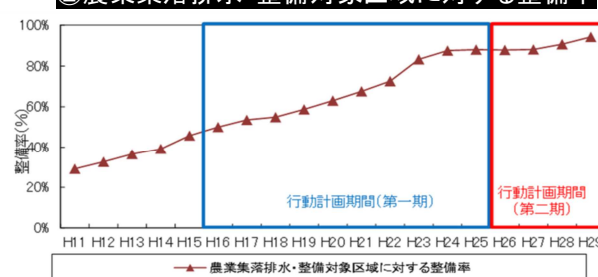
【今後の方針】

今後もこれまでの取組成果を踏まえ、汚濁負荷やごみの削減等の取組を行うとともに、効果のモニタリングを継続して行う。

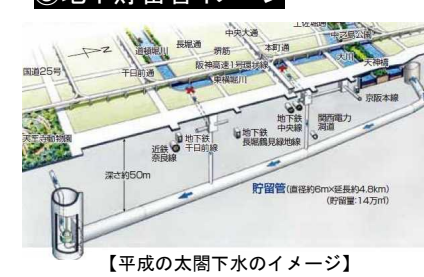
①下水道・高度処理普及率



②農業集落排水・整備対象区域に対する整備率



③地下貯留管イメージ

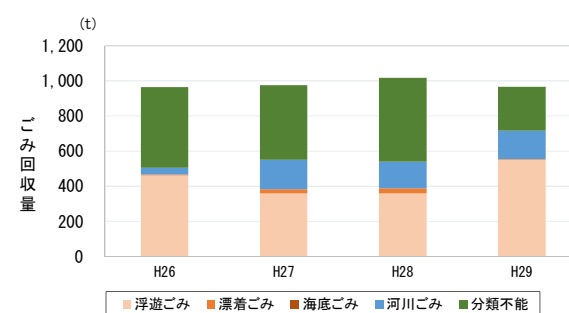


【平成の太閤下水のイメージ】

④市民や企業等の参加による森林整備(下草刈り体験)



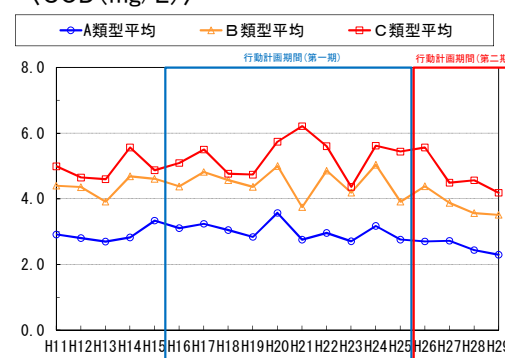
⑤市民参画によるごみ回収量



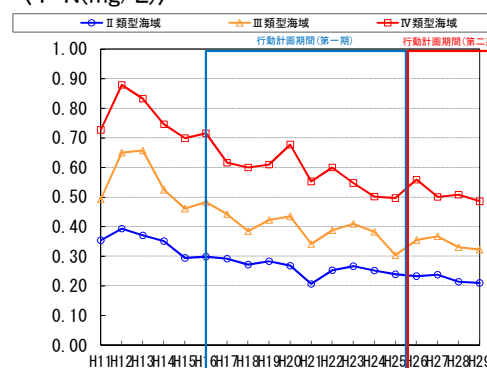
⑥大阪湾再生水質一斉調査の様子



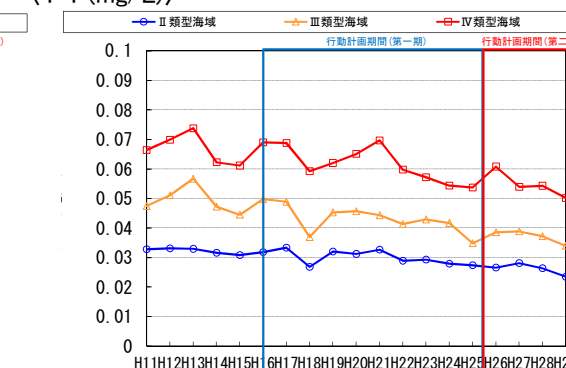
⑦汚濁負荷量(表層 COD、T-N、T-P)の経年変化



〈T-N(mg/L)〉

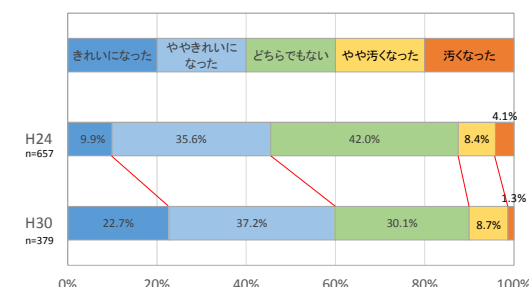


〈T-P(mg/L)〉

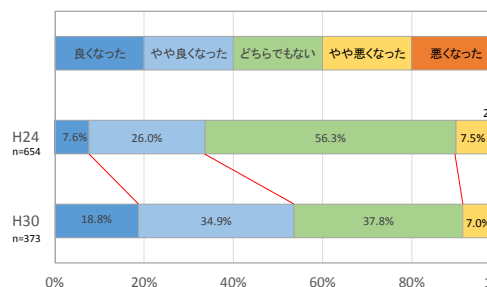


⑧利用者アンケート結果の比較

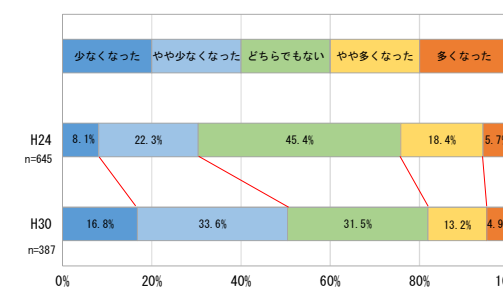
〈海の色〉



〈海のにおい〉



〈海や海岸のごみの量〉



『親しみやすい「魚庭(なにわ)の海」を達成するための取組』 の中間評価

【目標要素】

水辺に容易に近づける海、魅力的な親水施設や多彩なイベントがある海、市民や企業が積極的に関わる海を目指し、水に親しめる場の整備、イベントの開催、市民や企業の取り組みへの参画促進、取り組みの支援等を行う。

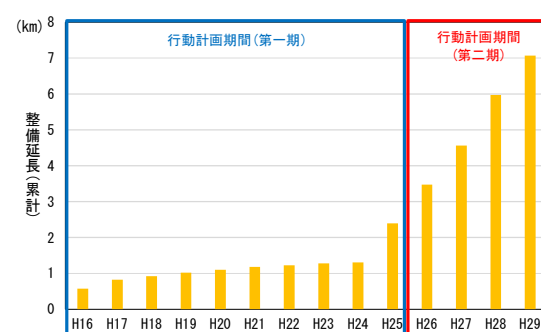
【施策の進捗状況】

- 市民に水辺に親しめる場を提供するために、湾奥部等において親水護岸や緩傾斜護岸の整備を推進してきた。(第二期計画以降は毎年 1km 程度整備) (①)
- 森林や緑地、運河周辺の親水緑地等の整備を推進してきた。(累計約 80ha)
- 市民、NPO、企業等の参加による森づくりとして、臨海部の堺第 7-3 区共生の森においては毎年 1 ha 弱の植樹活動を続けてきた。(②、③)
- 大阪湾の環境に対する理解を深めるためのフォーラム、環境学習会、見学会、セミナー等を、湾岸の各地で毎年継続的に数多く開催してきた。(③)
- 様々な取組においては、市民や企業、大学などの参画や協働を推進し、水辺に親しみならの海岸美化活動や環境モニタリング等が継続的に実施されている。(④)

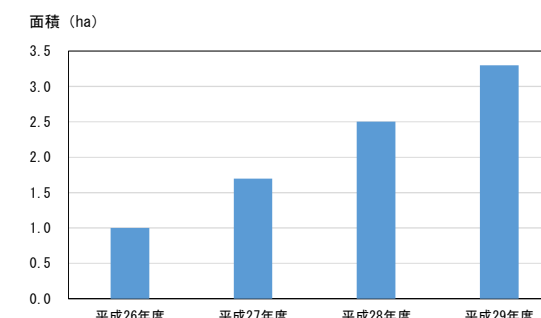
【評価指標】

- 大阪湾に親しむ場と親しむ機会が着実に増加しており、大阪湾周辺における水辺を活かした親水施設への訪問者数は毎年増加し、直近では年間で 600 万人に達し、「親しみやすい魚庭の海」を目指した取り組みの成果が表れている。(⑤)
- 大阪湾臨海部での利用者アンケート調査では、「海への近づきやすさ」が「改善された。やや改善された。」が 6 割を越え、「悪化した。やや悪化した。」の 1 割弱を大きく上回る結果を示し、大阪湾の親水性に対する利用者の評価は第二期計画の策定時に比べても大きく向上している。(⑥)
- 参加したイベント等に関する質問では、6 割が「改善点は無い」と回答し、大阪湾周辺で開催されるイベントに満足していることが伺える。(⑦)

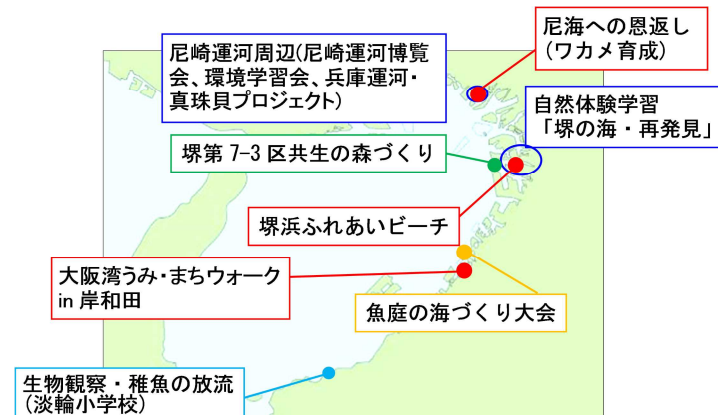
①親水護岸の整備延長累計(km)



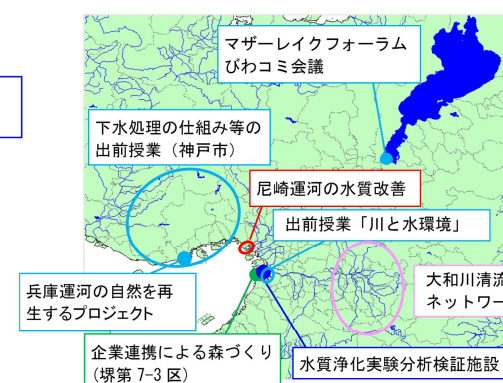
②堺 7-3 区「共生の森」の植樹面積累計(ha)



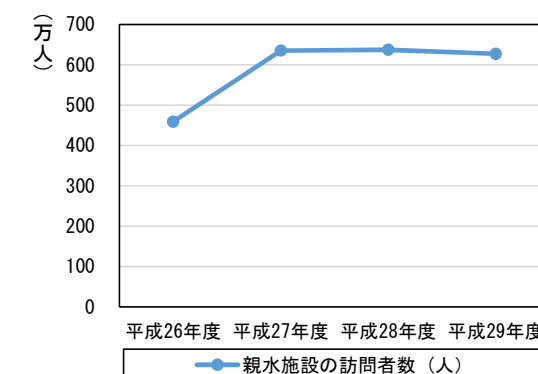
③主なイベントの実施場所



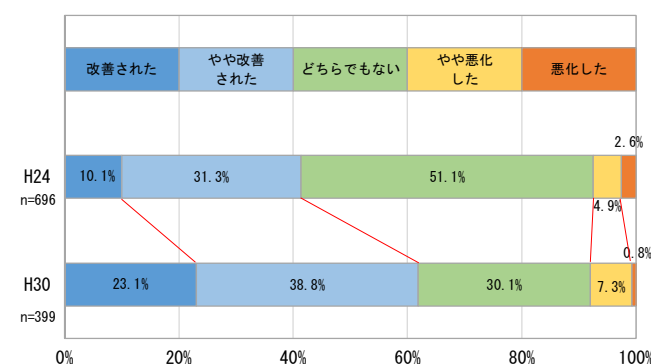
④主な市民や企業の取り組みの実施場所



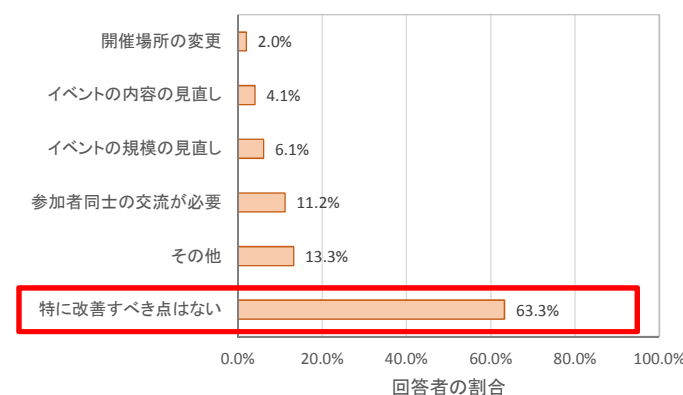
⑤大阪湾周辺の親水施設への訪問者数



⑥利用者アンケート結果の比較
〈「海への近づきやすさ」に関する印象〉



⑦利用者アンケート結果の比較
〈イベントの改善点〉



【今後の方針】

今後もこれまでの取組み成果を踏まえ、水に親しめる場の整備、イベントの開催、市民や企業の取り組みへの参画促進、取り組みの支援等を継続して行う。

『豊かな「魚庭(なにわ)の海」を達成するための取組』の中間評価

【目標要素】

多様な生物が生息し、豊富な海産物の恵みが得られる海を目指し、多様な生物が生息・生育できる場の整備や生息・生育環境の改善等の取り組みを行うとともに、効果のモニタリングを行う。

【施策の進捗状況】

- 直立護岸が多い湾奥部において、多様な生物や漁獲対象生物が生息・生育できる藻場、人工干潟、浅場、緩傾斜護岸等の整備（①）や攪拌ブロック礁設置（H26-H29：5.8ha）等による増殖場の整備、海底耕耘（8組織）等を進めてきた。
- 海底浚渫窪地の環境を改善するために、阪南2区沖窪地では港湾事業等で発生する浚渫土砂等の海底浚渫窪地への埋め戻し（②）や埋戻し後の覆砂等の検討を継続して実施してきた。
- 大阪湾全体としては栄養塩類は減少傾向にあるが、湾奥部には栄養塩類が偏在しており、湾口及び湾中央の海域では栄養塩類の不足が指摘されているため、栄養塩の供給を目的に、ため池の池干し（かいぼり）（③）を淡路市等で実施するとともに、特定の下水処理場での季節別運転管理を影響や効果を調査しつつ試行してきた。
- 事業実施箇所でのモニタリングや湾奥部のD0等の実態調査を継続して実施し、環境改善効果を把握してきた。
- 市民、NPO等の多様な主体の参加によるモニタリングを推進しており、産民官学が参画した大阪湾環境再生連絡会では約25地点：毎年1000名を超える参加者による大阪湾生き物一斉調査等が定着しており、調査結果はホームページやフォーラムなどの場で発信・共有してきた。（④）

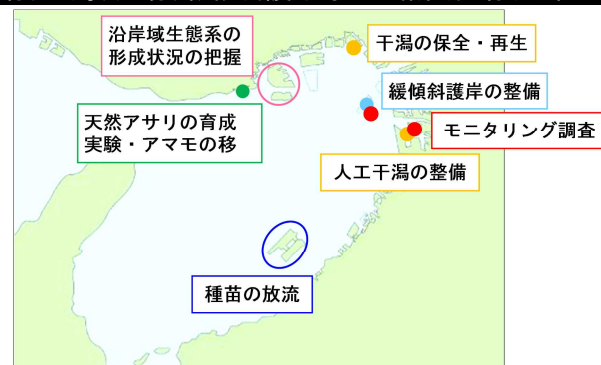
【評価指標】

- 大阪湾の水質調査の結果を見ると、底層D0は年による変動はあるものの概ね横ばい傾向を示している。（⑤）
- 一方で、大阪湾の生物調査の結果を見ると、近年では底生生物の確認種数や海岸生物の確認種数の増加傾向がみられ、「豊かな魚庭の海」を目指した取り組みの成果が表れている。（⑥）

【今後の方針】

今後もこれまでの取り組み成果を踏まえ、多様な生物が生息・生育できる場の整備や生息・生育環境の改善等の取り組みを行うとともに、効果のモニタリングを継続して行う。

①藻場、干潟、浅場、緩傾斜護岸等の整備実施場所(第二期)



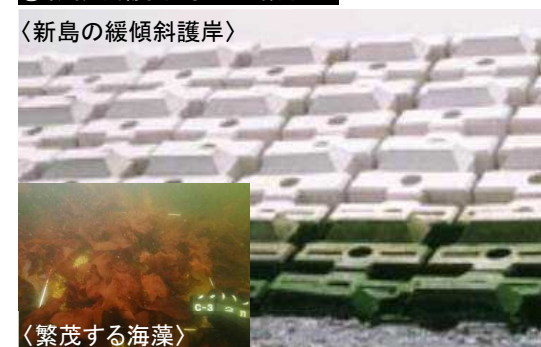
②窪地の埋め戻し実施場所とイメージ図



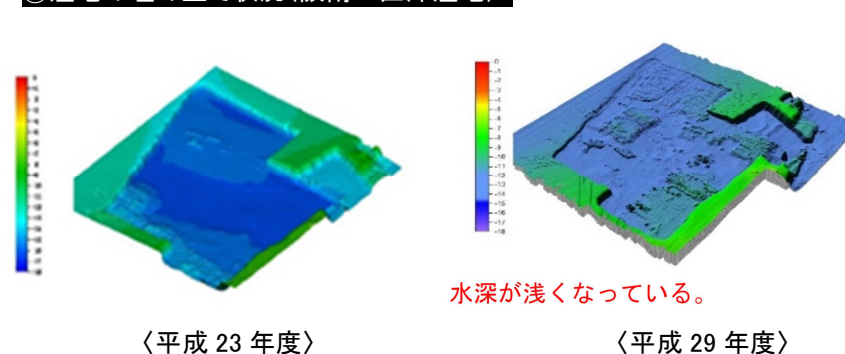
②窪地の埋め戻し状況(阪南2区沖窪地)



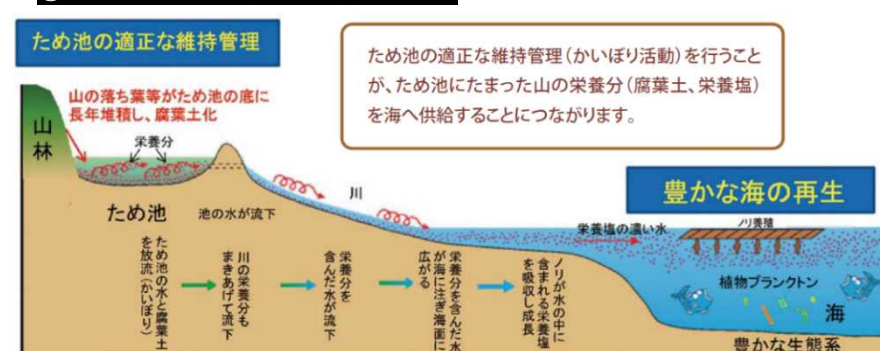
①緩傾斜護岸等の整備状況



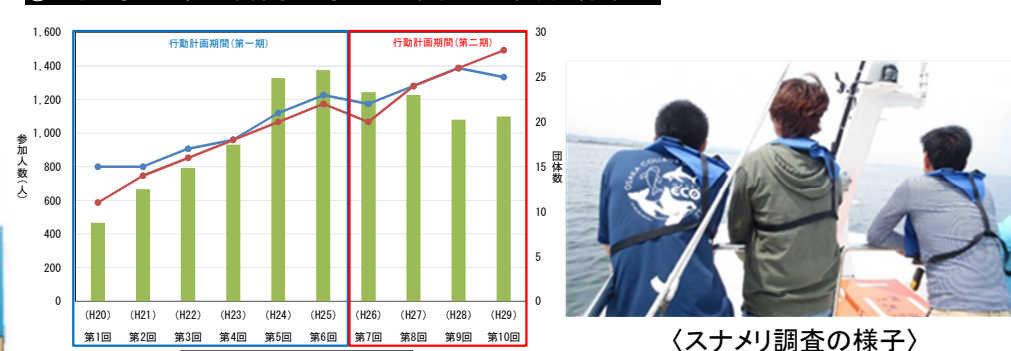
②窪地の埋め立て状況(阪南2区沖窪地)



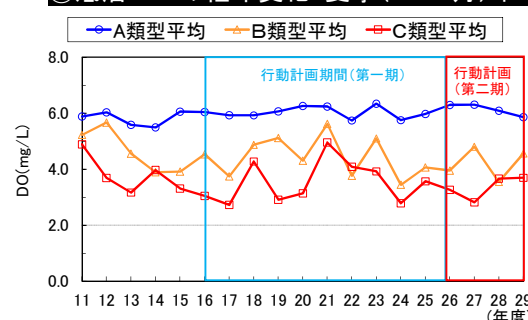
③ため池の池干し(かいぼり)イメージ



④大阪湾生き物一斉調査(参加人数、地点数、団体数)



⑤底層DOの経年変化:夏季(6~8月)平均



⑥底生生物の経年変化(種数:類型別)(抜粋)

